

〔生育診断ほ場の現在の生育状況（7月6日現在）〕

コシヒカリ：草丈・葉齢・茎数は平年並み。葉色は淡め。気温が平年並みに推移した場合でも、出穂期は平年より早い7月28日頃と予想される。

とちぎの星：草丈・葉齢・茎数・葉色は平年並み。幼穂は0.5mm、出穂期は早まると予想される。

〔今後のポイント〕

高温が予想されるので、こまめな間断かん水とする。

出穂が早まるので、防除等の作業適期を逃さない。

カメムシの被害を避けるため、出穂期前に草刈りを行う。

1 管内生育診断ほでの生育調査結果と出穂期予測

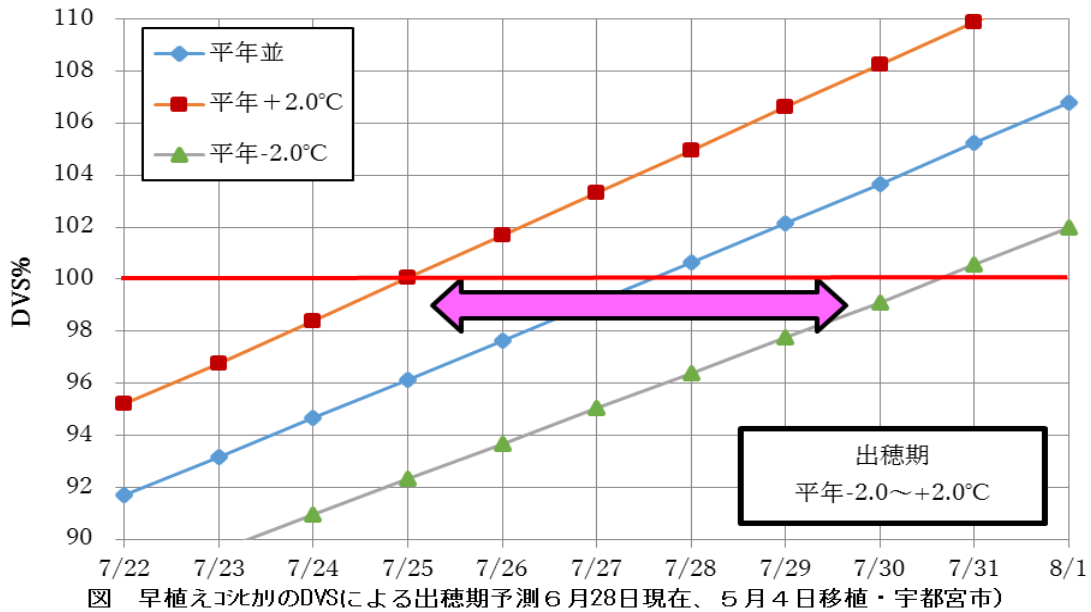
※生育診断ほでの結果ですので、ご自身のほ場をよく観察し管理するようにしましょう

7月6日調査	コシヒカリ（芳賀） 5月3日移植		とちぎの星（真岡） 5月12日移植	
	本年	平年比	本年	前年比
草丈(cm)	74.2	101%	65.4	103%
茎数(本/株)	24.1	-	24.3	-
葉齢	11.9	-0.3	11.1	0.1
葉色(葉色板)	3.6	-0.3	3.5	-0.2
幼穂長	2mm		0.5mm	

ほ場ごとにばらつきはありますが、生育診断ほでの生育は、コシヒカリでは、葉色がやや淡めで草丈・茎数・葉齢は平年並みとなっています。農業試験場（宇都宮市）では6月25日に幼穂分化を確認しました。（平年値6月28日より3日早い。）

とちぎの星は草丈・葉齢・茎数・葉色は平年並みとなっています。とちぎの星は6月28日に幼穂分化を確認しました。（平年6月30日より2日早い。）

調査の結果とこれらのデータから、コシヒカリの出穂期は、気温が今後平年並みに推移しても平年より2日早い7月28日頃と予測されます。（平均気温が+2℃高く推移すると7月25日、同-2℃低く推移すると7月31日の予測です。）（次ページ図参照）



2 技術対策

気象庁の「関東甲信地方 1か月予報」(令和4年7月7日発表、7月9日から8月8日までの天候見通し)では、“期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。平均気温は高い確率60%です。”と予想されています。降水量は平年並か少ない確率が30%ずつ、日照時間は多い確率が30%平年並の確率が40%ずつです。現時点で出穂が早まると予測されていることに加え、今後高温により生育が早まる可能性が高いので、作業の適期を逃さないようにしましょう。

(1) 水管理

現在の水稻の生育は幼穂形成期から減数分裂期を迎えつつあります。今後迎える出穂期は最も水を必要とする時期です。

この時期の干ばつは1穂もみ数の減少等につながるのので、不足しないようこまめな間断かん水とし、その後徐々にかん水間隔を伸ばしましょう。

生育ステージ	水管理	備考
出穂前 14～7日頃	間断かん水 (足跡にだけ水がたまる程度まで自然落水した後入水)	<ul style="list-style-type: none"> 最も低温に弱い。 最低気温17℃を下回る場合は深水管理とする。
出穂期	間断かん水	<ul style="list-style-type: none"> 最も水を必要とする。 こまめな間断かん水とする。
登熟期	間断かん水	<ul style="list-style-type: none"> 徐々にかん水間隔を伸ばす。 異常高温時は夕方～夜間のかん水によって地温を下げる。 <u>高温時に長時間湛水は高温により根腐れを起こすので、こまめな間断かん水を心がける。</u>

○胴割粒対策

胴割粒の発生は、外観が低下するだけでなく精米時に碎け易いことから、精米歩留まりや食味を著しく低下させます。毎年、管内でも等級を落とす原因の1つになっています。出穂後 10 日間の最高気温の平均が 30℃以上の場合などで発生が多くなるため、下記のような対策をしましょう。

① 「間断かん水」の実施（気温が下がる夕方以降に入水する）

出穂期から 20 日間のほ場内の水温、地温を下げることで発生が少なくなる。

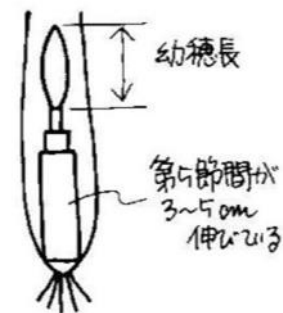
② 台風通過後のフェーン（高温・低湿）時は入水し、根を健全に保つ。

③ 落水時期は出穂後 30 日頃とし、その後も高温・多照が続く場合は、ほ場条件を考慮し、収穫 7～10 日前まで走り水を行う。

○出穂期の予測

株の中で最も長い葉の茎を抜き取り、基部をカッター等で縦に切断し、内部にある幼穂の長さを測りましょう。幼穂長により出穂までのおおよその日数が推測できます。

出穂前日数	幼穂長
25 日前	1 mm
20 日前	4 mm
15 日前	1.7 cm
10 日前	7.3 cm



(2) 病虫害の防除

今後の気温が高温に推移することで生育が早まると予想されます。このため、防除適期を逸さないよう注意しましょう。

○斑点米カメムシ類

畦畔のイネ科雑草は斑点米カメムシ類の誘引源、発生源、本田内へ侵入するための中継点となります。

本田内の除草及び水田周辺の草刈りを行って斑点米カメムシ類の発生しにくい環境づくりが大切です。

特に本年は梅雨が短く、雨が少なかったため「死ぬ幼虫が少なくなり発生が増える。気温が高いと成長が早まり、成虫になるまでの日数が短くなる。」（日本農業新聞. 2022-07-07）」ことが予想されます。。そのため、例年よりも早めの警戒・しっかりとした対策が必要です。



ホソハリカメムシ



アカヒゲホソミドリカスミカメ

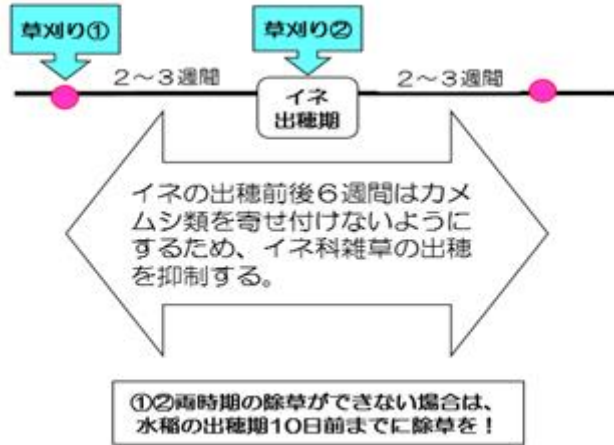


図 畦畔2回連続草刈りのイメージ

出典：栃木県農業環境指導センター

○いもち病 (葉いもち)

令和4(2022)年度 病虫害発生予報 第3号(栃木県農業環境指導センター令和4(2022)年6月17日公表)によると、向こう1ヶ月の気温が高く、降水量は少ないため、「やや少ない」発生予想となっています。

BLASTAMによる葉いもち感染好適条件判定結果では、6月下旬～7月上旬は管内で感染好適条件は出現していません。

(<http://www.jppn.ne.jp/tochigi/file/data/Blastam/2022.htm>)

しかし、管内でも場所によって発生が見られる所もあります。

いもち病は気温25℃～28℃で湿度の高い条件で感染拡大します。ほ場を良く見回り、早期発見・早期防除に努めましょう。

○稲こうじ病

昨年多発したほ場は、出穂10日前までに効果的な薬剤を散布しましょう。適期をはずすと効果が低下するので注意が必要です。

7月～8月は「農作業中の熱中症による死亡事故」が集中します。

夏の農作業で、以下のことに気をつけましょう。



- ・日中の気温の高い時間帯の作業は控えましょう。
- ・こまめな休息、水分補給を行いましょう。
- ・体調不良の症状がみられたら、すぐに作業を中断しましょう。